

2022年は早稲田大の創設者・大隈重信の没後100年に当たる。その大隈と親交が深かったのが同志社大の創設者の新島襄だ。節目の年に私学の「東西の雄」、早稲田大・田中愛治総長と同志社大・植木朝子学長が対談。目指す「学び」の姿などを語り尽くす。

司会／毎日新聞・中根正義  
構成／品田良弘

# 大隈重信 没後100年

大隈重信（1838～1922年）父は佐賀藩士。志士として活躍して明治維新後、参議や大蔵卿を務めるが、1881年に辞任。翌82年に立憲改進党を組織し、早稲田大の前身となる東京専門学校を創設した。88年には外相となり、98年と1914、16年に首相も務めた。



田中愛治総長

植木朝子学長

## 私学の「東西の雄」

# 早稲田大学 同志社大学 トップ対談

早稲田大学 1882年に創立された東京専門学校が前身。1902年に早稲田大学と改称。現在は13学部（通信教育課程を含む）に約3万8000人が学ぶ。総長室は東京都新宿区戸塚町

同志社大学 1875年に創立された同志社英学校が前身。1912年に同志社大学と改称。現在は14学部（約2万6000人が学ぶ。学長室は京都市上京区今出川通烏丸東入

## 「良心教育の継続を」植木朝子学長

大隈重信と新島襄は元々深い交流があり、同志社の創立に当たっては、大隈が物心両面で援助したということですね。

田中 NHKの大河ドラマ「八重の桜」でも、大隈が新島先生を財務的に助けるという場面がありました。経済的に困窮している同志社英学校を盛り立てるために寄付を集める奉加帳を回したと。

実は、私の恩師である内田滿教授が晩年に記した『政治学の一源流』という著書に登場する方々の多くが、同志社のご出身なのです。かつて早稲田では家永豊吉先生という同志社英学校出身の方が教壇に立った。このほかにも浮田和民先生、早稲田の野球部を創設した安部磯雄先生など、新島先生の薫陶を受けた方々が早稲田の教壇に立たれたのです。

植木 同志社にとっては、大隈先生が募金集会を開いてくださったことが、新島との交流のハイライトと言える出来事だと思っています。新島の大学設立運動に共鳴し

た井上馨氏と大隈先生のお二人が明治21（1888）年7月19日、経済界の重鎮を官邸に招いて寄付を募った結果、その場で3万1000円もの寄付の申し込みがありました。新島はそのことを「同志社大学設立の旨意」という文章などに記しています。

田中 大隈が「明治14年の政変」で下野した原因は民権議院の設立を、すなわち国民が議員を選んで設立する国会の開設を、唱えたことにあるわけです。その時に大隈が考えたのは、日本の近代化のためには二つのことが必要だったことでした。

一つは政党政治、健全な野党が政権を担う与党に対立する軸を掲げて国会開設を目指すことが重要だと。もう一つは、国民が政治家を選ぶには国民の質を上げ、それを受け入れられるシステムをつくらなければならず、そのためには高等教育が必要だというものです。その際、大隈が師として仰いだのが、自分よりも教育者として

## 「たくましい知性を」田中愛治総長

ものがあると思います。田中 大隈もやはり開明的であると同時に、多様性を受け入れる素地はあったようです。かなり早くからアジアに門戸を開いたのは早稲田の特徴です。1905～10年までの間、清国留学生部をつくって、中国や韓国をはじめとするアジアの国々からおよそ3000名の留学生が早稲田で学んだということですね。これが早稲田が東アジアで名声を得ることにつながった。早稲田を発展させた一つの原動力になったと思っています。

また、当時、東京帝国大は英語で授業を行い、テキストも英語だったと言われていますが、早稲田は高田早苗を中心として、海外の先端の政治学や法学、経済学を日本語に訳し、日本語で高等教育を進めた。このように、母語で高等教育を行ったのはアジアでは日本が最初で、先鞭をつけたのが早稲田だった。これは「早稲田大学講義録」として全国に配布され、全国各地から早稲田で学びたい若者が上京した。これこそ現代の国際化につながる早稲田の多様性の第一歩で、今ではアフリカや中東、南米、東欧など世界各地の留学生が早稲田で学んでいます。

早稲田は日本で最初に「GS（ジェンダー・アンド・セクシュアリティ）センター」を2017年に設立しました。男女共同参画はもちろん、性的少数者も自由に学べるような環境を整備しました。同志社大は入試で障害のある受験生も受験できる体制の整備に、いち早く取り組んできました。ダイバーシティの推進にも取り組んでいますね。

植木 目が不自由な学生も受験できるよう、1949年に国内で初めて入学試験における点字受験対応を開始するなど、早くから体制整備に努めてきました。今年度からは「スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室」という学生支援のための組織を立ち上げ、多様な性自認・性的指向を持つ学生のための相談窓口も設置しました。本学は元々、障がい学生支援に力を入れてきましたが、今後は男女共同参画に加え、性的少数者を含めた多様な背景を

の先達であり、専門家でもある福沢諭吉先生と新島先生でした。日本の近代化のために高等教育を進めるに当たり、福沢先生にいろいろと教えを乞うと同時に、新島先生の教え子である家永先生や浮田先生を東京専門学校に招いた。家永先生や浮田先生は留学経験があり、留学先の最先端の学問を早稲田に紹介してくださったわけですが、草創期の同志社の卒業生は英語で卒論を書き、発表するなど非常に能力が高かったとのことですね。そうした方たちの力を借りようと思った大隈も非常に開明的だったと思います。

植木 新島が国禁を犯してまで米国に渡ったという点は、やはり非常に開明的だったと感じています。彼にとつてキリスト教も大きな存在だったと思います。米国の先進

的な政治学や自然科学といった学問を吸収した上で、キリスト教主義に基づいた「德育」の部分を重視している点を顧みると、我々も創立者の想いを受け継いで、一人の人間としていかに教育に携わり、どのような人間を育てていくべきなのか、不断に考え続けなければならぬと思っています。

——新島がさまざまな人々と交流のネットワークを築き、反対勢力からも受け入れられたというのは、新島の人間性によるところが大きいのではないのでしょうか。

植木 新島は、徳育の基本をキリスト教に置いていただけで、他の宗教を否定しているわけではありませぬ。こうした寛容性、多様な考えや生き方を認め、受け入れていくという姿勢は、まさに現代のダイバーシティ（多様性）に通ずる



新島襄（1843～90年）父は上州（群馬県）安中藩士。64年に密航して渡米し、ヨーロッパでも学び、キリスト教の洗礼を受けて帰国。75年に同志社大の前身となる同志社英学校を設立した。同年に結婚した妻八重は2013年に放送されたNHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公